

重症心身障害児のQOLの向上について ～「ライフ イズ ビューティフル」への1歩～

16CC13 氏名 田川 浩太

I. はじめに

医療型重症心身障害児入所施設では、主に医療的ケアを必要とする方の支援を行い、療育だけでなく発達・年齢に合わせた知育教育も行っている。私は今回、活動を通じて他者と関わることが好きなA様と出会った。A様のさらなるQOLの向上を目標とした介護計画を実施したため報告する。

II. 実習先種別・実習期間

医療型重症心身障害児入所施設

2017年6月26日～7月28日（うち23日間）

III. 事例紹介

A様 20歳代 女性

1. 家族構成及び生活歴

両親の面会が月に1回、兄の面会が年に3回ほどある。

2. 入所に到った理由

自宅での療養は無理ということで、リハビリと療育目的で浜松リハセンターより転院入所する。

3. 健康状態

主な疾患は脳性麻痺であり、上下肢ともに、左方麻痺である。

4. 日常生活の状況

動作に制限があるが、落ち着いた生活を送れている。

5. 性格

他者と関わることが好きである。

6.1日の過ごし方

リビングで車椅子に座り過ごしている。周囲を良く見ており職員が失敗したり、つまずいたりしている所を見て良く笑っている。雑誌をめくり笑っている様子も見られる。活動の時間では意欲的に取り組んでいる。

IV. 介護の実際

1. 課題の発見と分析

施設が提供している活動以外にもチャレンジしたいという意欲がある。本人の「したい」「できた」という気持ちに共感する必要がある。また、車椅子を自操する能力を最大限に発揮する必要がある。

2. 介護上の課題

施設で提供している活動に飽きてきてしまったため、新たな活動の提供が必要である。トイレや浴室まで行く際、車椅子を押してしまうことで「できる活動」を妨げている。

3. 介護目標

長期目標：活動の選択を行い、安定し、自立した生活を送れるようにする。

短期目標：(1) 2つの活動を提示し、選択した活動を実施することで他者との関わりを持つ。

(2) 車椅子で自操したいという意欲を引き出す。

V. 実施及び結果

短期目標(1) 塗り絵では当初は私の手を取り一緒に行い楽しそうな様子が見られた。枠からはみ出さずに塗ることは困難であるが、筆圧が強いことから塗る面積が広いものを提供することにより、1人でも行える可能性が

浮上した。1人で実施して頂く上でも関わりはあると感じて頂くため「隣にいる」という声かけを行った。開始直後に自然と真剣な表情になり集中して行っていた。時よりこちらをちらっと見ることはあったが、最後まで自力で全て塗ることができた。塗り終えた後は笑顔になり「みてみて」と私の腕を引っ張ったり、周囲にアピールをして関わりを持っていた。

塗り絵では2つの提供方法で実施したが、2人で行う際は非常に楽しそうにしていること、1人で行う際は非常に集中していることが分かった。どちらもご本人にとってのニーズであるため臨機応変に2つの方法で提供する必要がありと考えられる。

短期目標(2)当初(7月10日)は「塗り絵をしましょう」という声かけに「はい」返答されるが、「道具と一緒に取りに行きましょう」という声かけには拒否された。しかし活動を重ねるにつれて、声かけで車椅子を自操し居室へ道具を取りに行くことができた。(7月10日)さらに、私がプリントを持っているのを見るだけで自ら車椅子を自操し居室へ向うようになり、居室とリビングの往復をすることができるようになった。(7月19日)その際、非常に笑顔であった。短期目標(1)の活動への意欲の向上が車椅子自操の意欲へと繋がったと考えられる。また、その日限りではなく、7月19日以降毎日、車椅子自操で居室へ向かうようになり、継続した結果になった。今回は、トイレや浴室まで行くという計画の立案は行わなかったが、活動道具を取りに行くという「目的」と活動への「意欲」をつくり、援助をすることで達成できたと考えられる。そのため、「目的」を明確にし、「活動」への意欲を向上させることが、トイレや浴室まで車椅子自操することに繋がり、自立した生活を送ることができると考える。その結果、A様のQOLの向上に繋がるのではないかと。

VI. 考察

A様に活動と車椅子を自操する機会を提供することで、集中する時間、楽しむ時間、他者と関わる時間、能力を最大限に発揮する時間ができ、1日の生活にメリハリができた。その結果、A様のQOLに影響を与えることができたと考える。さらに、藤岡¹⁾は「重症児が家族と一緒に生活できること」¹⁾が重症児のQOLの向上に繋がると述べている。今回の活動は施設内で、A様・職員・私だけの参加であった。そのため家族に活動をしている様子や日常の様子を見て頂くような機会や、施設内でのイベントに参加して頂くようにする事が生活支援を行う介護福祉士の役割であると考えられる。また、熊谷²⁾は「障害者の自立支援運動」のスローガンは「施設から地域へ」²⁾と述べている。これらのことから、重症児が家族と一緒に生活できる機会を設けること、地域へ参加することができると、その先に「ライフ イズ ビューティフル」「人生はたからもの」と実感できる人生になると考える。

VII. おわりに

本研究を行い、我々は利用者様の目先の生活をサポートするのではなく、長い目でその方の人生を共に歩いていく必要がある。1日1日のQOLの積み重ねがその方の人生のQOLに繋がる。つまり我々はその方の人生そのものを預かる責任ある存在でなければならない。どのような関わり方や活動の選択・提供がその方のQOLにとって良い影響を与えるものなのか理解するためにも、学びを深めたい。

参考・引用文献

1)藤岡一郎(2000年)「重症児のQOL」

出版社 クリエイツかもがわ p.34.35

2)熊谷晋一郎(2011年)「TOKYO人権 第56号」出版社 東京都人権啓発センター <https://www.tokyo-jinken.or.jp/>